

## 斯波氏時代の歴史と遺産

**鎌倉御家人の配置** 源頼朝は藤原氏一門による摂関政治を否定し、本格的な武家政権を確立した。源頼義・義家の系譜を引く頼朝は、文治5年（1189）に平泉藤原氏を倒し、合戦の恩賞として平泉藤原氏が支配していた土地に関東（鎌倉）御家人を配置した。県内に所領を得た御家人は、『吾妻鏡』では、近江国の工藤行光（岩手郡）と武蔵国の葛西清重（胆沢・江刺・磐井・気仙郡ほか）が確認できる。記録に表れない和賀郡の和賀氏、稗貫郡の稗貫氏、遠野保の阿曾沼氏なども地頭職を得たと考えられている。保は国衙領の占有を認められた所領単位である。

志波郡の北上川西部は、記録を欠いているが、鎌倉初期に下野国の足利義兼に与えられ、その地頭職は義兼の子孫に相伝された。鎌倉時代中期に義兼の後裔である家氏は、足利嫡流から分家して志波郡を名字の地として「斯波氏」を興したが、斯波氏を名乗ったことは記録から確認できない。北上川東部には河村氏が奥州合戦の恩賞として所領を得たと家伝は伝えている。南北朝時代の「遠野南部家文書」には、志波河村氏と考えられる「河村又次郎入道」の名が南部氏とともに登場することから、当時、志波郡に所領があったことは確かと考えられる。

この両氏を含めて北奥羽に所領を得た御家人は、自身は東国の本領や鎌倉に住み、現地には家臣や一族郎党を派遣して所領の経営に当たらせ、自らが所領がある現地に土着するようになるのは鎌倉時代後期頃と考えられている。

鎌倉時代から南北朝時代の紫波町の歴史は、志波郡を領知した高水寺斯波・志波河村両氏の二頭支配を主軸として展開された。この両氏の統治の実態や動向などについては、現地に残る一次史料は皆無に等しく不明な部分が多い。後世に編纂された歴史書や史料がその系譜や事績をわずかに伝えるだけである。

**高水寺斯波氏** 高水寺斯波一族の歴史は、鎌倉時代初期に足利義兼に与えられた志波郡の所領が、鎌倉中期に足利氏4代康氏の長子家氏に相伝され、足利嫡流から分家してその後裔が志波郡を名字にして「斯波氏」を興したことに始まる。斯波を名字として名乗るのは室町時代に入ってからである。家氏のひ孫の高経は、足利尊氏の室町幕府の創建に尽力している。宗家（本家）の斯波氏は、高経の子義将以後、足利氏一門の筆頭の家柄を誇り、細川・畠山両氏とともに幕府三管領の要職を担い、その嫡流は武衛（ぶえい）家と呼ばれた。

斯波氏宗家から多くの庶流（分家）が家を興し、奥羽地方に定着した庶流は「奥州斯波氏」といわれる。奥州総大将である足利家長の系統は、「高水寺斯波氏」と呼ばれ、斯波氏発祥の地であることから一門の中では名門とされ、高水寺城を志波郡の統治拠点とした。

高経の弟家兼は、吉良満家とともに奥州管領となり、その嫡子直持（ただもち）は、足利家氏の所領である下総国香取郡大崎（千葉県香取市）を名字に「大崎」を名乗り、宮城県北の大崎五郡を勢力基盤にした。その後、大崎氏は奥州探題に任じられ、一族は探題職を歴任した。家兼の次男兼頼は出羽国において「最上」を称し、羽州探題職を世襲することとなった。

高水寺城は、旧紫波・岩手郡の中世城館の中では最も巨大な城館の一つとされる。その城域は南西に連なる向山、吉兵衛館跡（中野館跡）から国道4号線を跨いだ戸部（こぶ）御所まで連郭式に続き、勝源

院の寺域を含む広大な範囲と考えられている。吉兵衛館の周辺には廃寺になった能勝寺や勝源院の前身である蟹沢庵（かいたくあん）があったとされる。

**志波河村氏** 志波郡において、八戸の根城（ねじょう）南部氏や県南の葛西氏などとともに南朝（公家方）を支持したのが北上川東部の志波河村氏である。室町時代に岩手郡・志波郡の北上川東部に大萱生（おおがゆ）・手代森・栃内・江柄・大巻・川村・日戸・玉山・下田・渋民・川口・沼宮内氏など、郷の地名を名字にした「河村党」と称される一族が所領を得ていた。

この河村党は、奥州合戦の恩賞として源頼朝から志波郡・名取郡（宮城県）などを給与された相模国の河村秀清の後裔と称しているが、世代及び事績については不明な部分が多い。

志波河村氏は、興国2年（1341）に南朝の南部・滴石・和賀の諸氏とともに北朝方と栗屋川（厨川）で交戦するなど南朝に忠節を尽くしてきた。しかし、高水寺斯波氏が志波郡高水寺城に定住するとみられる延文年間（1356～60）頃になると、大崎斯波氏（宮城県）や高水寺斯波氏などの足利方の優勢に抗しきれず、河村党の多くは高水寺斯波氏の支配下に組み入れられた。

応永3年（1396）頃に大巻館の河村秀基は、高水寺斯波氏に屈服してその家臣となったと地元では伝えている。斯波氏に臣従した志波河村氏は、拠点の大巻館から南方の左比内館へ城館を移し、熊野神社の再興などの事績を伝えるだけである。これ以降の志波河村氏の動向や事績は地元資料がなく不明で、戦国時代に入って多少の動きが知られるだけである。志波河村氏の凋落によって、高水寺斯波氏の支配権は志波郡一円に及ぶようになり、名実ともに郡主としての地位が確立され、北奥羽における足利方の重鎮として奥州支配の一翼を担うこととなった。

**南北朝時代の志波郡** 元弘3年（1333）に鎌倉幕府が滅亡し、後醍醐天皇は東北支配を重視するため北畠顕家を陸奥守に任じ、多賀城（宮城県）に下向させた。北畠顕家は、陸奥国府の下部機関として各地に郡奉行を設置した。陸奥北部に置かれた糠部（ぬかのぶ）郡奉行に任命されたのが八戸根城の南部師行である。奥州南部氏が史料に表れるのはこの頃からである。

建武2年（1335）、足利尊氏は顕家に対抗できる権威として足利高経の子（または養子）の家長を奥州総大将に任じ、南朝勢力と対峙させた。これ以降、奥州の豪族たちは公家派（南朝）と武家派（北朝）に分かれて対立抗争することとなる。足利家長は、足利尊氏の嫡子義詮を補佐する鎌倉府執事を兼ね、関東・奥羽地方における足利方勢力の拡大をはかった。しかし、建武4年（1337）、奥州軍を率いて南下してきた北畠顕家との合戦で敗北し、わずか17歳の若さで自害した。家長は、『太平記』の建武4年（1337）に「志和三郎」・「志和弥三郎」と見え、斯波氏を名乗っていないが、この時代に「志和」がすでに使用されていたことがわかる。

高水寺斯波氏の出自・系譜については、志波河村氏と同じように諸説・異伝が多く不明な部分が多いが、高水寺斯波氏は、家長の養子詮経（あきつね）が継いだとされる。家長の自害後、斯波氏宗家の家督は、高経の子義将が継いで室町幕府の管領職を世襲するようになる。この時期の志波郡の状況を示す史料は少ないが、高水寺斯波氏は南朝の中心勢力だった陸奥北部の南部氏や中部の葛西氏の間際に位置して、陸奥北部を支配する足利方の重要な拠点であった。

**室町時代の志波郡** 室町幕府は、鎌倉幕府の基盤であった関東を統治するための政庁として鎌倉府を置いた。元中9年（1392）、室町幕府3代将軍足利義満は陸奥・出羽両国を鎌倉府の管轄とし、奥州管領職を廃止した。応永6年（1399）、鎌倉公方（鎌倉府長官）足利満兼は2人の弟を稲村・笹川御所として下向させた。ところが、翌7年、幕府は大崎満持を奥州の出先機関である奥州探題に任命した。奥羽地方の室町幕府体制は、鎌倉府と奥州探題大崎氏を中心に展開されることとなった。大崎氏は奥州管領などを務めた斯波氏の支族である。

奥州探題は、室町幕府の意向を奥州で体现することとなり、奥州の国人の身分秩序は大崎氏を頂点に編成され、統率されていった。その大崎氏と並び称されたのが高水寺斯波氏である。

高水寺斯波氏は、紀伊国の米良氏に伝来した「米良文書」では、「奥州の大崎・斯波両氏」と並び称される存在であったと伝える。『聞老遺事』に収められている「稗貫状」によれば、高水寺斯波氏は、永享7年（1435）に和賀氏の内紛に端を発した合戦で、八戸（根城）南部氏や探題大崎氏とともに軍勢を出している。高水寺斯波氏は、「大將軍斯波之西御所五条殿子息」として登場し、斯波御所が大崎氏に代わって北奥羽の武士を指揮して乱を鎮めている。また、室町幕府の政所代蜷川親元（にながわちかとも）が記した『親元日記』では、高水寺斯波氏は『斯波三十三郷領主』と記録され、当時の室町幕府から認知された存在であったことが知られる。

**戦国時代の志波郡** 室町時代後期の南奥羽地方では、大永11年（1514）、伊達植宗（たねむね）が陸奥国守護職に任命されると大きな動きがみられた。これによって大崎氏が世襲してきた奥州探題職は形骸化していった。その後、伊達氏は大崎氏を武力で圧倒して支配下に置くようになった。弘治元年（1555）には伊達植宗の子晴宗（政宗の祖父）が奥州探題に任じられ、奥州探題大崎氏を頂点とする奥州のこれまでの室町幕府の時代的な秩序は崩壊することとなった。

天文8年（1539）、家格の上昇を目論む南部彦三郎（三戸南部氏）が上洛し、室町幕府12代将軍足利義晴から「晴」の一字の偏諱（へんき）を受け、南部晴政と名乗った。三戸南部氏は、幕府から北奥羽を代表する大名として認知されるとともに、南部氏惣領の地位を認められたことを示す。このような三戸南部氏の中央政権への接近は、豊臣政権下でもみられ、その延長線上に斯波氏の滅亡があり、盛岡藩主南部氏による近世志和（志波）郡の歴史が始まる。

三戸南部氏は、騎馬軍団による強力な家臣団を編成し、北上川流域での覇権をめざし積極的な動きをみせるようになった。三戸南部氏の南下政策は、高水寺斯波氏にとって重大な脅威となり、北上川中流域の覇権をめぐる両者は近隣の領主を巻き込みながら抗争を繰り返した。

天文6年（1537）、高水寺斯波氏は、三戸南部氏の南下に対して稗貫・和賀氏等の諸氏と連合して反撃している。高水寺斯波氏は、伊達氏が陸奥国守護となって奥州探題大崎氏の権威や威勢が凋落しても、北奥羽において將軍家につながる高い家格を背景に、近隣諸氏と婚姻関係を結びながら地方権力の中核としてその家格や威勢を維持していた。

天文9年（1540）、三戸南部氏は、石川（南部）高信を総大将に岩手郡滴石（雫石）城の戸沢氏を敗走させ、岩手郡をほぼ領域にした。これに対し、天文14年（1545）、高水寺斯波氏は、岩手郡を攻略

し、雫石城・猪去館にそれぞれ一族を配置し、その勢力は一時、岩手郡にも及んだ。元亀2年（1571）、斯波領の百姓が他領の不来方へ年貢米を納入したことを発端とする争乱が生じた。元亀3年（1572）、三戸南部の石川高信は高水寺斯波氏を攻撃し、斯波氏は敗北した。稗貫大和守の仲裁で和睦したが、斯波氏は見前館や見前村（盛岡市）以北を南部領として割り渡すこととなった。この合戦は石川高信の没後であり、年代的に疑問がある。さらに、九戸政実の弟弥五郎を高水寺斯波氏の婿養子とし、高田郷（矢巾町）を領知させた。弥五郎は知行地の地名を名乗って高田吉兵衛と称し、高水寺城出丸に屋敷を設け、「吉兵衛館」と称された。

天正14年（1586）、三戸南部氏は斯波（志波）御所の一族雫石御所を滅ぼした。天正14年（1587）、高水寺斯波氏の女婿になっていた高田吉兵衛と高水寺城主斯波民部大輔との間に不和が生じて、吉兵衛はこれを機に斯波家を出奔した。南部信直は出奔した高田吉兵衛に中野館（盛岡市）配置し、斯波氏と対峙させた。高田吉兵衛は中野直康と改称している。高水寺斯波氏から離反し、三戸南部氏に寝返った中野直康は、斯波氏の有力家臣である築田・岩清水・大萱生氏らを南部氏側に取り込む画策をし、徐々にその勢力を拡幅させていった。

天正16年（1588）、陣岡に結集した三戸南部氏は、高水寺城を攻略し、高水寺斯波氏は滅亡した。同19年（1591）に高水寺城は三戸南部氏によって郡山城と改称されている。

天正16年（1588）5月に斯波孫三郎詮直（詮元・詮基）が大旦那（施主）として志和稻荷神社の本殿を造営している。小旦那として斯波家臣の中でも大身であった平沢館の館主築田詮泰が名を連ねている。斯波氏は同年秋に没落していることから、ごく短期間に築田詮泰は斯波氏に造反したことになる。下剋上を絵にかいたような出来事である。

高水寺城は、城山の西に連なる広い城域や多くの屋敷跡は県内では最大級の中世城館である。室町時代から戦国期の城郭遺構として極めて重要であり、近世・近代に改変したことが確認されているが、その価値は揺るぎない。

**奥羽仕置後の志波郡** 豊臣秀吉は、戦国期の戦乱の原因は戦国大名が境目争いを自らの武力で解決しようとするにありと捉え、すべての紛争を秀吉の裁定に従わせ、停戦に応じない場合は武力で制圧する方針で領国の平和を実現しようとした。この姿勢は「惣無事令」として発令された。この私戦禁止の基調は、村どうしの喧嘩の規制にも適用され、「百姓」の武装を禁止する「刀狩」令も惣無事政策の一環とされる。

九州の島津氏を服属させ、小田原の北条氏を滅亡させた秀吉は、和平・和睦への関与を奥羽地方に向けた（奥羽仕置）。天正18年（1590）7月、宇都宮に到着した秀吉は、小田原合戦に参陣しなかった葛西・大崎・和賀・稗貫氏らの改易（所領没収）を決定した。南部信直（三戸南部氏）は、豊臣秀吉から与えられた「領知朱印状」（県指定文化財）によって、岩手・稗貫・和賀郡を含む「南部7郡」の所領安堵を受けた。天正16年（1588）に三戸南部氏によって攻略された志波郡は、この朱印状によって南部領に組み込まれたとされるが、別な見方もある。

豊臣政権の支配下に組み込まれた奥羽地方では、太閤検地によって諸大名家の石高が確定し、それを基準に軍役が課せられた。石高制によって大名の所領規模（例えば盛岡藩20万石）を簡単に把握され、家臣の知行高（領地）や俸禄（給料）、農民の年貢計算にも適用された。

豊臣政権によって各大名は城下への居住や諸城の破却が義務付けられた。三戸南部氏は盛岡城を築き城下を整備するとともに、盛岡藩の統治機構を整備していった。高水寺城は盛岡城築城の際に藩主の一時的な居城として整備されたが、後に代官制の整備によって廃城となった。斯波氏の旧家臣の大半は盛岡藩の家臣として南部氏に召し抱えられ、盛岡城下に移転することとなった。この兵農分離によって志和（志波）郡の中小の城館は取り壊され、農村から武士が一掃されることとなった。徳川政権（江戸幕府）は、秀吉が導入した石高制を封建社会の体制原理として踏襲し、強力な領主権をもつ將軍（幕府）と地方大名（藩）が土地（版）と人民（籍）を統治する支配体制（幕藩制国家）を確立し、この体制が明治維新まで続いた。

奥羽仕置による奥羽大名の再配置は多くの不満と軋轢を生んだ。改易された葛西氏・大崎氏の旧臣が中心となった葛西・大崎一揆が発生した。これに呼応して和賀・稗貫一揆、九戸一揆などが生じた。天正19年（1591）、豊臣秀吉はその鎮圧のため大規模な軍勢を派遣し制圧した（奥羽再仕置）。多くの歴史教科書は、小田原の北条氏の滅亡をもって天下統一されたと記述するが、秀吉の全国統一は奥羽再仕置によって名実ともに完成したといえる。

天正16年（1588）に南部信直によって高水寺城を攻略された斯波詮直（詮元）は、山王海へ潜伏していたが、翌17年に大萱生秀重に扶助を求めた。しかし、この秘匿が密告され、斯波詮直（詮元）は大迫へ逃走後、再度山王海へ立ち戻り潜居したとされる。秀重は謀叛の企てと疑われ、南部利直によって大萱生館が急襲されたと伝えられる。

慶長五年（1600）、会津の上杉景勝は石田三成と結んで山形の城主最上義光を攻撃した。徳川家康から最上氏救援の命を受けた南部利直は山形へ参陣したが、そのすきに乘じた和賀郡の旧主和賀忠親や大迫の旧主大迫又三郎は、伊達政宗の援助を得て一斉に蜂起した。この一揆に乗じて斯波氏の残党が蜂起した。山王海に潜伏中の斯波詮直（詮元）は、この一揆に呼応し、譜代の旧臣を率いて長岡館へ押し寄せたが、城門が堅く閉ざされて入ることができず、再度敗走を続けたと伝えられている。高水寺斯波氏の末路については、諸説があり確かなことは不明といわざるを得ない。しかし、『聞老遺事』の「大坂（大阪）御陳御人数積」には、「斯波孫三郎八人」と記録されている。斯波詮直（詮元）が南部氏に仕えて五百石を給与され、大坂（大阪）冬の陣に従者8人を率いて従軍したのは事実と考えられる。したがって、経緯は不明であるが、斯波詮直（詮元）は一揆後に南部氏に召し抱えられ、従軍後に南部氏から離れ、同族の最上氏に扶助を求めたと考えられる。

**斯波・河村氏時代の城館** 鎌倉時代の志波郡における高水寺斯波氏や志和河村氏の初期の拠点遺跡はまだ明らかにはなっていないが、高水寺斯波氏は高水寺城付近、志波河村氏は大巻館近くに拠点があったものと考えられている。鎌倉幕府の滅亡後、この地方では北朝を擁する足利方と後醍醐天皇の南朝方が相争う南北朝の内乱が繰り広げられた。戦国時代には自らの力で領国を作り上げ、独自の支配を行う戦国大名という地方権力が誕生し、その覇権をめざして戦闘が繰り返された。戦乱に備えた城館が河川を利用した丘陵などの要害の地に築かれた。

室町時代から戦国時代には、防衛的要素が整備され、複雑・堅固な城館へと変化していった。天正20年（1592）の盛岡藩領における城割書上である「南部大膳大夫分国内諸城破却共書上之事」によれば、

町内では片寄・肥爪・見舞・長岡・乙部城が破却になっている。これ以外に北条館・大巻館・佐比内館など多くの城館が当地方に存在していた。

**斯波氏・河村氏時代の遺産** 高水寺斯波氏・志波河村氏時代の遺産は、城館跡や寺院（跡）・修験院坊・鎮守社が多いが、造営当時の状態を残しているものは皆無に近い。志和稻荷神社は、天正16年（1588）に斯波孫三郎詮直が大旦那（施主）として本殿を造営したことが棟札銘によって確認できる。現在の本殿は江戸末期の建造とされ、内宮殿は桃山様式を残すが江戸初期の造作とみられている。これ以外には仏像・板碑・懸仏・銅鏡などの宗教遺産がわずかに残るだけである。また、寺社には戦国末期の社寺領を安堵した黒印状などの歴史資料が残る。

平安時代中期から鎌倉時代にかけて、仏教界では祈禱や学問中心のものから離脱して、内面的な深まりを追求し、庶民など広い階層を対象とする浄土系諸宗や禅宗系の新たな宗派が台頭し、地方に伝播された。是信は鎌倉時代初期に和賀地方に入り、浄土真宗を布教し、彦部村に本誓寺を建立した。是信は浄土真宗の開祖親鸞の高弟とされ、その布教は出羽・陸中地方にも及び、その廟所が彦部に「是信房墓所」として残る。

広泉寺は、五郎沼近くにあった寺（仏堂）である。嶋の堂境内にある乾元2年（1303）碑の存在から、鎌倉時代末期には創建されていた可能性がある。天台・真言系寺院の中には、新興仏教の影響を受けて転宗する寺院もあった。赤石大明神（志賀理和気神社）の別当である遍照寺は、稗貫郡寺林郷に光林寺が建立されるに及び、天台宗から時宗に改めた。『光林寺起志』では、元享3年（1323）頃に天台宗から時宗に改め、光林寺の末寺になったという。

鎌倉仏教は、室町時代に入って急速に伝播し、当地方においても曹洞宗・浄土真宗・浄土宗など各地に新興宗派の寺院が創建された。平沢の広沢寺（曹洞宗）は、寺伝によると応永2年（1359）に正法寺（奥州市）2世月泉良印の弟子端山恵忍によって開基された。遠山の正音寺（曹洞宗）は、高水寺斯波氏の開基（大旦那）を伝えている。寺伝によれば、文正年中（1466～67）に正法寺2世月泉良印の弟子大応玄徹が開山したとする。北日詰の覚王寺（天台宗）は、天台宗恵我法師が慶長3年（1598）に円学院（覚王寺）を中興開山したと伝えている。

土館源勝寺（廃寺）は、斯波氏の菩提寺であったことから志波郡内でも屈指の有力寺院であったが、近世初期に盛岡城下に移転した。盛岡源勝寺には、県内最古といわれる銅像観音菩薩立像（国指定重要文化財）が安置されているが、土館源勝寺にあった仏像と考えられている。

鎌倉・室町時代の仏教文化の典型を示すものとして板碑がある。鎌倉時代から室町時代にかけて、多くの板碑が造立され、武士の信仰に強く関連すると考えられている。当地方で蓮華寺があった赤沢薬師堂周辺や大荘厳寺があった五郎沼薬師神社周辺などに多く分布し、おおむね鎌倉時代中期以降の板碑が多い。いずれも北朝年号が刻まれた板碑が多く、当時の志波郡が北朝の勢力下にあったことを物語っている。